

一年の締めくくりになる12月。私にとって、それにふさわしい素晴らしい能を観ました。

12月19日梅若能学院会館で演じられた「MUGEN∞の会」の『松風』です。「∞の会」は宗家の内弟子から独立されたシテ方の坂口貴信・林宗一郎と、狂言の茂山逸平・野村太一郎という20代！30代の若手の能楽師4人で今年結成されたばかりの会。古典芸能の新しい担い手として期待の人達です。

東京公演は能「松風」「山姥」の二番と狂言の他、観世流の錚々たる人たちの仕舞も披露され、若手をバックアップして伝統芸能を盛りたてていこうとする空気が満ちていました。それが総合力を発揮して、素晴らしい能舞台になったのだと感じます。

『松風』シテ(松風)坂口貴信、ツレ(村雨)林宗一郎、ワキ宝生欣哉、地頭・梅若玄祥、大鼓・亀井広忠、

小鼓・飯田清一、笛・藤田六郎兵衛、間・茂山逸平、後見・浅見真州 坂口信男

「熊野、松風、米の飯」と、言わずと知れた人気曲で、特に謡ではお馴染みですが、私は能で観たことは今までに3回と少ない方です。今回は最初から最後まで息が詰まると言うか、ちょっとオーバーな表現なら身が震える程の気分になり(本当に観ている間中、そんな気がしました。体感正直！)、『松風』の素晴らしさに圧倒されました。とにかくとても美しいのです。その感激の余韻が翌日まで続き、観能を趣味に持てた自分が本当に幸せだと思いました。

さて、これ程までの感動とは。印象に残ったことを思い出すままに綴ってみたいと思います。

ワキの登場・名宣の後、白い水衣のツレとシテが橋がかりに現れるのですが、両人はまるでベルトコンベアに乗ってきたのかと思うほど全く体を揺らすことのない美しい運び。まず今日の演者は相当修練を積んだ人だなと目を奪われます。そして真ノ一声から息がピタッと合った同吟。時にはシテの伸びやかな謡いふりとツレの少し抑え気味な謡が交互し、この出だしの部分で一気に能に引き込まれてしまいます。

そして地頭のリードが素晴らしくて地謡が堪らなく聞かせてくれます。「寄せては帰るかたを波・・・」では息のツメ・ヒラキで白波が押し寄せてくる感じ。名人の謡と言うのはかくばかりかと驚きました。

『松風』で有名な節「灘グリ」は、謡を学ぶ者にとって難関なので、耳を凝らして聴きましたが、坂口さんの真骨頂とでも言うのか、気負わず、肩の力も抜いた自然の感じの高音でサラリ。聴く方はキューン！！全体に言えることですが謡う時、どんな場合も体が微動だにしないのにもホント感心しました。

「月は一つ 影は二つ・・・」の名場面では白砂も月に照らされ銀色に広がっている光景が目には浮かびました。そして私の感動のハイライトは松風が葛桶に座り、村雨が下居している時の場面。両人がシオル所作も見事できれいだけれど、そこに居る姿だけでも美しいのです。5・6年前関根祥六さんの能楽講座を聞いた時、祥六さんは「私の理想は彫像です」と言われました。私もこの場面を観て納得しました。能は動かぬところに凄い美があると。まるで一幅の名画を見るようでした。

この後、村雨は笛座に下がり、松風は行平の烏帽子、狩衣に替えます。私は初めて舞台上で、後見が水衣の糸を鉋で切り、狩衣の打ち合せを糸で縫う所を目撃し、能装束って面白いなとも思いました。

淡い紫の狩衣を着た松風は今までの憂いに満ちた風情から、恋慕の念で雰囲気が一変。情感が溢れ村雨との問答そして中の舞、破の舞となります。・・・全てはワキの夢だったのか、須磨の浦は村雨の降った夜が明けて、松風の音だけ。臉には若くて美しい汐汲み姉妹の残像が映りました。

『松風』は深読みすると、行平と二人の姉妹という組合せで結構危ない話だと私はかねがね思っていました。今回、演者の端正で清楚な感じに、能らしい浄化がされていることも感銘を受けた一因です。

能は「一期一会」。この日は演者、地謡、お囃子が揃って素晴らしく、記憶の中に深く刻まれました。私は坂口さんを10年位前から着目し(家元のツレなど出演多数)、独立後も楽しみにしていますが、狂言の野村萬斎さんと同様、能楽界に必要な活気を呼ぶ待望のスターだとも思いました。拍手。